

Title	永井義雄著 イギリス急進主義の研究：空想的社会主義の成立
Sub Title	A study of English radicalism, by Yoshio Nagai
Author	白井, 厚
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.10 (1962. 10) ,p.952(94)- 956(98)
JaLC DOI	10.14991/001.19621001-0094
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19621001-0094">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19621001-0094</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

永井義雄著

## 『イギリス急進主義の研究』

——空想的社会主義の成立——

白井厚

これは特殊な思想史研究である。特殊という意味は、一八世紀なかばから一九世紀なかばにかけての、「自然法思想から功利主義への転換という、興味ある重大な思想的現象が生じた時期」を、イギリス急進主義の流れの中で追ひ、あわせて、副題にもあるように、空想的社会主義の成立を急進主義との関連で分析するという特殊な問題意識がとられていることであり、また同時に、そのために、ロバート・ウォーレス、リチャード・プライス、ジョージ・フリーストリ、ジョン・カートライトなどの、これまで言及されることの少かった特殊な思想家を対象としている点である。従来の思想史研究はとかく思想史上の個人崇拜の傾向が強くて、このようないわば脇役の演技に照明を当てるといふ面倒な操作を怠ってきた。この書は、なによりも先ず、思想史におけるこの方面の重大な空白を埋め

るほとんど最初の文献という先駆的意義をもつ。

## 二

ここではじめに、この書の積極的な主張のいくつかを紹介しよう。序文において、著者の問題視角はほぼ次のように示されている。

- 一、名譽革命体制にたいする、急進主義のかかわりかた。
- a、イギリス急進主義が関係した十八世紀における三つの人口論争が示すような、名譽革命体制の経済的側面すなわち本来の重商主義にたいする、そのかかわりかた。
- b、統治機構としての名譽革命体制にたいしてとった、その理論的態度。

二、ウォーレスとオーエンの場合、矛盾のない社会を構想するのだが、そのニュートピアを、急進主義との連関で分析すること。このような視角のもとに、ほぼ次のように議論が展開される。

## 第一章 ロバート・ウォーレスのニュートピア

ウォーレスを忘却のふちから救い上げた最大の功労者はマルサスであるが、そのため彼は人口論においてのみ記憶され、皮相な解釈をうけることとなった。だが彼の人口論は、社会体制、政策体系の当否を判定するためのものである。また彼の全著作を統一的に把握する必要がある。そのために先ず、彼の *A Dissertation on the Numbers of Mankind in Ancient and Modern Times, in which the Superior Populousness of Antiquity is maintained, 1753* の本文末尾における「スコットランド開発計画」を検討し、それが開明的地主の性格に

おいてなされたことを確認し(二七頁、ついで「ヒュームとの人口論争」を通じて、それがスコットランドの近代化をめぐる論争であり、ウォーレスは「本源的蓄積過程にたいして地主的反応をしめし」「資本主義的工業の大幅な制限と、地主指導のもとにおける農業振興」小作人の安定(五三頁)を求めたことをみる。しかも同時に、かれは「十八世紀なかばまでに達成されたスコットランドにおける市民的自由を制限ないしは放棄しようとはしなかった」ので、「それを地主のイニシアティブにおいて実現せんとしたウォーレスの見解は、それゆえ、重商主義、とくにスコットランドの重商主義が、イングランドとの対抗と追従とのなかでとった強力な工業の創出育成策にたいする、当時ありえたもつともするどい修正提案として理解される」(五三頁)ことになる。そして最後の著作 *Various Prospects of Mankind, Nature and Providence, 1762* において、従来の統治制度(社会体制)と教育制度(思考様式)への批判が強まり、ついに現状の完全な否認、ニュートピアにまで達した。だがそれは、「奢侈と勤勉」のヒュームに對して、「質朴と勤勉」をスロイガンとした「くらいニュートピア」であった。彼は、「地主的反生産力の立場」から理想社会の自動崩壊を説いたのみならず、「私有財産と労働力の存在形態のうち当時の根本原因をみいだした」が、「現状否定の立場にたつ空想的社会主義者のそれとは役割をことし、むしろ現状擁護のために未来に設定されているという側面をもつ」(六三頁)。彼は従来小市民的急進主義に属すると考えられていたが、彼の意図は、地主の土地改良を軸とする農業

生産の振興、それに必要な限りでのマニユファクチュアの振興で、「このようないわば重農主義的態度は、小市民的急進主義者にはほとんどみることができないものである。そうして、かれの意に反して急速に進展する資本主義的工業を前に、かれがニュートピアの構想に進んだのも、小市民的急進主義者にはみられない現象であった」(六一七頁)。このようにして、ウォーレスはロック主義者から除かれるが、彼によって行われた近代資本主義の全面的批判がその後どのようにうけつがれていくかという問題を提示することとなる。

## 第二章 小市民的急進主義

ここではプライス、プリーストリ、カートライトの三思想家を対象とし、かれらは「独立小生産者のことなる階層を代表しており、おなじロック主義のなかでも、かなりことなる理論的主張がなされていたことが、しめされている」(七頁)。先ず「小市民的急進主義の一典型」プライスは、その道徳哲学において、神の性質として永遠絶対化した道徳哲学体系によってヒュームの功利主義—保守的現状肯定論を拒否し、その政治・経済論において、小農的立場から、イギリス憲法を熱烈に擁護し、「小生産者を没落せしめる資本主義的發展傾向にたいしては、道徳哲学の分野から経済論にいたる諸領域で、かれは、成功のみこみのないたたかいをいどんだ」(一三七頁)。それに対してプリーストリは、功利主義を肯定し、進歩思想をもち、「小生産者の性格をほとんどまったくもってはいなかった」(一五三頁)。「プライスが没落をおそれる小市民の最上層だったとす

れば、プリーストリは、それをこえて上昇する独立生産者」(一五六頁)である。そして「改革の父」カートライトは、アングロ・サクソン社会の自由と、ノルマンによるその抑圧とを論拠に議会改革を主張した。彼は、「プライスの依拠した階層よりもまししい階層に立脚して」(二七八頁)、「プライスやプリーストリら十八世紀小市民的急進主義の主流を批判した」(二七七頁)。彼は、「ジャコブ・ベンディに同調しえなかつた十八世紀小市民主義の主流」と区別されて生き残り、その主張は選挙法改正後労働者階級にうけつがれていく。

第三章 哲学的急進主義と空想的社会主义

哲学的急進主義は功利主義を基礎とし、新マルサス主義をとり、「確立しつつある資本主義的秩序を、産業資本のイデオロギイとして、一方では絶対視しつつ、他方では、その秩序のもとで一切の経済的害悪を除去しようとした」(八頁)。著者は「資本主義的秩序の絶対視にせめられる現実主義」としてリカードゥを、「その資本主義的秩序が必然にふくむところの諸害悪を、資本主義のわくのなかで解決しようとするある程度の空想性」の極端な例として、オーエンの空想的社会主义を指摘する。

オーエンは、「功利主義の環境論的教育論によって階級対立を緩和し、階級協調による労資双方の利益の増大を実現しようというつよい信念をいだいていた」。かれは「資本主義における盲目的な利潤追求の態度が、労働者に低賃金を強制し、そうしてそのことにより有効需要を減少することになり、そのために不況を惹起しているという判断から、盲目的利潤追求を企業者に強制する自由競争、し

たがってまたその基礎としての分業の批判にまで到達した。そして「このユートピアによって、ともかくも哲学的急進主義は、自己自身への痛烈な反省をもった」し、また自己の課題を果してその歴史的使命をおえたとき、「自己の最良の息子J・S・ミルによって体系的批判をうけることとなっていた」。ミルはすでに急進主義の名で呼ぶことは困難となつて、「急進主義は自己の最良の息子によって解体せしめられた」(二〇頁)のである。

三

以上のように、本書は三つの章からなり、それはそれぞれの思想家に対する個別研究であると同時に、急進主義ユースの中における自然法から功利主義への転換過程の研究であり、また同時に、急進主義の崩壊、空想的社会主义の成立史の研究でもある。以上のことを念頭において、以下に若干の私の疑問を述べて著者の教示を得たい。

先ず本書の構成について。イギリスの急進主義は、特にそれを独立小生産者の基礎のものについてみると、市民革命期の平等派に始まる。そして、「ブルジョア革命の激流のなかでこそ、根なし草的エピソードにとどまつた平等派の急進主義は、やがてロックを経由して、一八世紀の産業革命期における小市民的急進主義にうけつがれていくのであり、このことはたんに思想だけの継承を意味するのではなく、社会的(階級的きそ)にも、ある種の連続性をみいださる。もちろん、一七世紀なかばの小市民層が、一八世紀後半

の小市民層とおなじ内容をもっていたわけではないが、他方で資本家への上昇転化がおこなわれている過程で、不断に脱落をつづける広汎な層は、近代プロレタリアートの社会史のおよび思想史的な前提をなすものであった。(水田洋編「イギリス革命」二一三頁)このような急進主義こそが、ペインやゴドウィンに鼓吹され、一九世紀に至っていわゆる土地社会主義やリカードゥ派社会主義、さらにはロマン主義、空想的社会主义の支持者などを生み出し、ロンドン通信協会やチャーチズムなどの運動に吸収されていったと思われる。その際、このような小ブルジョアの路線と、ベンサムなどのブルジョアの改革の路線の差はかなり明確であつて、議会改革という共通項をもちながらも、(a)ベンサム・リカードゥ学派を中心としたブルジョアの改革と弁護論的経済学、(b)「資本II賃労働関係の確立に対する批判的態度」(六頁)をもち「経済学的に無能力であつたがゆえに政治的にラディカル」(八二頁)な小ブルジョア的要求とははつきりと区別されねばならない。たとえ選挙法改正が、哲学的急進主義者のみならず小市民的急進主義及び労働者との広い統一戦線によって始めて達成され、一九世紀の急進主義が一般にベンサム主義の濃霧に包まれてしまったとしても、われわれはこの二路線の間に、理論上のみならず実際運動上の根本的な差を見いだすことができる。ところが本書は、「近代資本主義の全面的な批判」を強調してウォーレスから出発し、小市民的急進主義↓哲学的急進主義のコースをたどる。著者の積極的な結論を借りてウォーレスの地主性をとれば、これは地主↓独立生産者↓産業ブルジョアという忙しいみ

ちゆきであつて、J・S・ミルの自伝という終点に達した時には、どこかでポイントを切り間違えたのではないかという気がしないでもない。

このような錯覚を起す理由の一つは、著者の大胆なトリミングである。限られた頁数の中に新しい研究を効果的に盛り込む苦心を察しつつも、極端なトリミングによって画面における人物の位置が不明になったという感も免れない。レヴェラーズやデイガーズが省略されているため、ウォーレスのユートピアによる開題の意味がつかみにくいし、その地主性と現状擁護を強調されると、著者は一体彼を急進主義の範疇に含めるのか疑問となる。その急進主義について、「ブルジョアの秩序を、統治と経済とにおいて実現する運動」(二〇頁)と定義するならば、ハチスン・ヒューム・スミス・リカードゥの系列は立派にその資格を得、哲学的急進主義がこれに接続するであろうのに、この系列は省略されている。そして急進主義をこのように定義すれば、当然反資本主義的性格の強いゴドウィンなどは、ここから除外されると思われる時に、ゴドウィンは、急進主義が関係した三つの人口論争の一つの当事者として極めて重要な位置が与えられ、しかもその分析は再び省略されていて、急進主義の重要な一環が理解の外に置かれている。

第二に、自然法から功利主義への転換過程について。著者はこれを「ハチスン・ヒュームの保守主義的、ブルジョアの系列」と、ロック主義者たちによる「ロック理論の解体作業」の二つに分け、後者をその分析の対象とする。著者によれば、一八世紀なかば以後の

自然法思想のおもな担い手は独立小生産者で、彼らはロックと思想的にも社会的にも共通な基盤をもち、ロック主義者といわれる。だがそれは、思想的にも社会的にも解体しつつあるもので、自然状態の仮設や自然権の把握、市民社会の把握において、ロックとは一定の差異をもち、ロックの自然法を、市民社会における自己保存―自然権の主張として、解体したかたちで継承した(二二頁)。そこで小市民的急進主義II ロック主義II 自然権思想(七九頁)となり、プライスがその典型として示される。だがここでも、著者がそのロック像を省略しているのが、登場人物のロックに向ける視線について若干の疑問が生ずるのである。先ずロックの社会的基盤については議論の多い所で、没落過程の小生産者思想的にも社会的にも共通だというだけでは不明な点が多い。またロックには、著者もいうように「プライスの拒否する『功利の原理』がある」(九九頁)ので、「ベンサム主義の真の祖」(ラスキ)とさえいわれる。ロック主義を自然法(または権)だけに限定すると、たとえば功利主義を奉じ、「小生産者の性格をほとんどまったくもってはいなかった」(一五三頁) プリーストリをもって、「小市民的急進主義の主流」(二七七頁)に数えるのは妙な感じもするし、小市民的急進主義に属しながら功利主義を受容したゴドウィンやトムスンについては、「産業革命が、独立小生産者を、かれらの願望にもかかわらずおしつぶしたとき、自然権の主張もまた、消滅にちかおしつぶされた」(二二頁)というだけでは不十分であろう。問題は、小市民的急進主義の内部において、自然権思想がどのような役割を果たし(最後の重要な例はホジス

キン)、どのようなかたちでベンサム主義を受容せねばならなかったかということのように思われる。そこで、功利主義化の帰結を哲學的急進主義にたどるだけでなく、ペイン、ゴドウィン、さらにはブレイスその他群小思想家の運動の中にそれを探ることが、本書の課題となるのではないだろうか。空想的社会主義の成立も、それを運動として見た場合、このような人々との関連の分析がおそらく不可欠であろう。

終りに、急進主義を理解するのに欠かせない鍵として、諸外国の革命運動と宗教を挙げたい。この書もちろんアメリカとフランスの革命の影響について触れているが、諸外国の急進主義者について説くところが少いのでイギリスの独自性が不明だし、その関連で重要な事柄が省略されているのが残念である。宗教については、清教徒の一部が急進主義を形成して以来議会改革運動の中核は非国民的自由に拡張し、議会改革を進めた。(Cf. R.G. Cowherd: The Politics of English Dissent, 1959, p. 8) プライスやプリーストリが率いたユニテリアン派はいかに及ばず、ゴドウィンなどの牧師出身者を含めれば急進思想家の多くは非国教徒で、Revolution Societyその他の多くの団体をつくり、たとえばフォックスなどもこれとの連繫を策すほど大きな力をもっていた。名譽革命体制の経済的側面及び統治機構に対する彼らの態度には、その宗教的信条が大きく影響していると思うのだが、誤りであろうか。

(お茶の水書房・A5・二八四頁・八〇〇円)

### 新刊紹介

小島 清著

#### 『世界経済と日本貿易』

第二次大戦終了直後は世界経済自体が攪乱されていたばかりでなく、国際経済学もまた整備された状態になかった。戦後十七年たった今日、世界各国も戦後復興期から経済発展の段階に入り、学界もまた、何が世界経済の一次的攪乱であり、何が構造的変化であったかを識別できる段階に達した。戦後あれほど議論されたドル不足問題は先進工業国間ではもはや解消したように思われ、世界経済の問題として、西欧共同市場、国際通貨制度、後進国経済開発と援助、東西貿易などの諸問題が浮び上ってきた。このような問題はバラバラに生じたのではなく、世界経済の新しい体制への転換に連なる一連の問題である。小島教授は世界経済の大きな流れを把握しようとする態度を示され、すでに「世界経済と技術」(一九四三年、商工行政社)、「赤松要教授と共著」、『国際経済論』(一九五〇年、新紀元社)を著わされた。いまこれに続く第三集として本書を世に問われたわけである。

### 新刊紹介

本書の狙いは、戦後世界経済の基本問題を一九世紀初頭以来の世界経済の長い歴史的發展の動向のなかに位置づけ、理論的背景の筋を通して解明し、世界経済の将来を展望することと、世界経済環境の省察から日本経済と日本貿易の進路についての指針を明示することにある。内容は三篇にわかれ、第一篇では一八〇〇年頃からの世界経済の生成と発展と比較して、戦後の世界経済の構造変動を素描し、E.P.C等にあらわれた共同市場的運動の必然性と論理を究明、第二篇では、ドル不足問題を反省し、ドル不足解消に伴ってあらわれた国際通貨の問題が、トリフィン案の検討を通して取り扱われ、後進国援助問題の在り方におよぶ。第三篇では世界経済の動向に対応する日本貿易の発展と構造変動を輸出・輸入両面から跡づけ、将来への進路を追求されている。

本書はすでに発表された諸論文をもとにしてまとめられているので、小島教授の論文を従来から追ってきた者にとっては、すでにおなじみの論理が展開されている。国際経済学者として比較優位にもとづく国際分業の理論が基本となり、そのうえに合意的分業にもとづく新しい理論などが教授独特の豊かな、雄大な構想と、綿密な作業により、比較的長期の世界経済を対象としながら、そのなかにみ

ごとに生かされていることを読者は認めるであろう。(勁草書房・A5・四三七頁・一四〇〇円)

高島善哉

水田 洋著

平田清明

#### 『社会思想史概論』

社会思想史という表題によってかかれた文献は、内外ともきわめて多数にのぼっている。それらはともに、ことなつた視角と方法をもち、多様な課題をもっている。この本は社会思想史概論という表題だけをみると、そのような多種多様な方法と課題をもつ社会思想史学に対して、ある最終的な結着をつけ、いままでの研究成果に一つの通説をつくりあげようという意図のもとにかかれたものと思われがちであるが、それは必ずしも当らない。この本が概論の名にふさわしい広汎な内容をふくんでいるとしても、それが、この本の意図ではないのである。

この本は社会思想を、社会における人間のあり方についての思想、生き方の問題(三四四頁)として一貫してとらえ、諸社会科学の成果を、そのように明確な、鋭い問題意識に立って、もう一度構成しなおそうという積極